

(地学) 傾向と対策

傾向

地学基礎とその発展項目から、基礎～標準レベルの問題が中心である

① 出題形式

基本的には大問3問構成(2025年度2月3日試験のみ大問4問)である。2月試験(前期)2月3日、2月4日は全問マーク式、3月試験は記述式で、試験時間はいずれも60分である。設問数は2月試験(前期)2月3日、2月4日ともに30問である。選択肢は4～8択程度で5択や7択の問題が多い。設問形式は、語句選択、数値選択、正文・誤文選択、整序、数値計算、図表選択など多岐にわたる。3月試験の設問数は30～40問程度で、設問形式は語句や数値の記入、選択肢からの記入、30～50字程度の論述、過程の記入も含めた計算などである。全日程を通して、地学基礎の範囲の基本的な知識や理解を問う問題が大半を占める。ただし地学の範囲や中学理科の範囲もある程度問われ、思考力や読解力、計算力を問う問題も含まれる。

② 出題内容

各大問では狭い1～2分野に関する設問が出題されることが多い。特に、地球の概観と構造、重力、地震と地殻変動、火山と火成岩、地層の形成、顕生代、大気中の水、日本の天気、海水の組成、海波、地球環境、太陽系の天体、太陽の誕生の各分野からは出題されやすい。2月試験(前期)2月3日の第1問は宇宙の誕生、銀河系、恒星と太陽の誕生、太陽系の天体、地球の運動と宇宙分野全体から幅広く出題され、第2問は海陸風と季節風について、第3問では地球の形と重力について出題された。2月試験(前期)2月4日の第1問は火山地帯の地質図について、第2問は水の状態変化と大気の断熱変化について、第3問はオゾン層とオゾンホールについて出題された。3月試験の第1問は近地地震の走時曲線について、第2問は火山と集中豪雨による自然災害について、第3問は温帯低気圧と熱帯低気圧について出題された。

③ 難易度

基礎～標準レベルの問題が中心である。語句・数値選択、正文・誤文選択、図表選択問題は、その出題分野に関する基本的な知識を正確に理解することで、大部分の問題が正答できる。整序問題や計算問題も、教科書の演習問題と同程度の難易度のものが多い。ときにはやや細かい知識が問われる出題もあるが、問題や図表を丁寧に読み解くことで選択肢をある程度絞れることも多いので、諦めずに取り組みたい。3月試験の指定字数に収める論述問題

や、計算過程の記述も求められる計算問題は、必要な要素を盛り込んで簡潔に答案を作成することに慣れておく必要がある。

対策

教科書を見返しながら基本的な知識を確実に固めていき、問題演習もこなそう

全設問の半数程度は地学基礎の範囲からの出題であり、とりわけ知識問題の配点が高い。まずは教科書などで、地学基礎の基本的な知識とその理解を確実に固めることが重要である。特に、地球の概観、地震、火山と火成岩、地層の形成、顕生代、大気中の水、日本の天気、海水の組成、太陽系の各分野は、地学の範囲や中学理科の範囲とのつながりを意識して、地学基礎の教科書の発展項目に目を通したり、中学理科の教科書を見返したりするとよい。地学の教科書や資料集などでは、地学基礎と関連する範囲を見比べるとともに、重力、風、海流、波などの頻出分野にも目を通して、基本的な知識をおさえたい。教科書の演習問題を解けるようになることが望ましい。

図表が与えられている問題も多いので、教科書や資料集に載っているさまざまな図表に見慣れておくことも大切である。また、複数の地学用語を自分なりに関連づけて図表にまとめて覚えることも効率的な知識の確認になる。

ある程度の知識をつけたら、問題演習をこなして、解けなかった問題について教科書などで復習する機会にするとよい。過去問で演習を行うときには、実際の試験時間と同じ 60 分で解いてみて、時間配分などを確認しよう。大学入学共通テストの過去問や模試で演習を行うときには、多少長めに時間を使ってもよいので、知識の抜けがないか確認することに重点を置くとよい。

記述式の 3 月試験の受験も視野に入れる場合は、指定字数に収める論述問題や、計算過程の記述も求められる計算問題など、記述形式の答案作成の練習も行っておきたい。指定字数のある論述問題の対策としては、代表的な地学用語の意味や、地学現象の原因、理由などを 30～50 字程の字数でまとめる練習をして、おおまかな字数の感覚をつかむことが大切である。論述問題の答案を作成するときには、まずは答案に盛り込む要素を箇条書きにして書き出して、要素に過不足がないかを確認し、指定字数に収まるように取捨選択してから書き始めるとよい。計算問題の計算過程を記述するときには、採点者に誤読されないように見やすく、必要な計算式を簡潔に書くことを心掛けよう。